
活動紹介



9月には可憐なコスモスが咲き誇り、ひと足早い秋の訪れを知らせてくれます。

活動紹介

種子島医療センターバスケット部 MEDS

病院長補佐／眼科部長 田上 純真

種子島医療センターバスケット部MEDSは、毎週火曜、木曜、日曜に定期的に練習を行い、また地元の中高生を混じえて育成のお手伝いもさせていただいています。50すぎのおじさんから中学一年生まで幅広いメンバーが集まり、毎回苦しく楽しく汗をかいております。

昨年度の熊毛郡総合選手権(12月20、21日、西之表市民体育館)では、遂に創部10年目にして西之表ラスカルズを決勝で破り優勝、熊毛郡クラブチームの頂点へ上り詰めることができました。



創設時のメンバーは田上(ジャスティン)、上妻(ナオト)、福山(タツミ)、宿利(シェイク)、須山(スーパーフライ)、武石(ヒサオ)、の6人。その後私たちのチーム理念に賛同し、毎年少しずつチームメートや学生さんが増えていきました。

今では当部でバスケットを学んだ中学生、高校生たちがそれぞれの部活動で活躍し、あるいはさらにステップアップを目指して鹿児島県の強豪高校や大学へ進むようになりました。

同時にわたしは一昨年からは県立種子島高校バスケットボール部の監督を務めさせて頂いております。種子高バスケット部はこれまでに地道な努力を積み重ね、ベスト16を狙えるチームへと成長を遂げました。今も昔も高校生は目がキラキラしてきれい。どんな境遇にあっても笑顔をやさしくなくひたむきに練習しています。生徒さんたちと触れ合うことで、わたし自身が大いに救われ、成長できることが本当に喜びとなっています。いつもありがとうございます。

百折不撓、雲外蒼天。木鶏の如く。

わたしたちは基本的な理念である、年齢を問わず初心者からみんなでワイワイと楽しめるバスケットを、といったマインドは今までもこれからも変わることはありません。スポーツで汗を流し、健康を維持し、ストレスを発散させ、たまにはみんなで語らう時間を共有する。種子島の生活の中に自然に寄り添える、楽しいクラブをこれからも続けていきます。今後ともよろしくお願い致します。



原点となった3×3大会出場



SKUNK(スカンク)時代のメンバー



種子島高校バスケットボール部の生徒たち

種子島医療センターサーフィン部 (Tanegashima medicalcenter Surfing Club:TSC)

サーフィン部部長 3階西病棟看護師 大中 沙織

2026年度からサーフィン部にプロサーファーの須田喬士郎くんが仲間に加わりました。サーフィン部のインスタグラムも復活し、海で撮影会もしました。みなさん、ぜひご覧ください。

撮影会の後は、部員の貸し切りでサーフィンができました。波は小さいですが、貸し切りというのが最高でした。仲間だけで海を貸し切れるのも、種子島ならではのかもしれません。

今後、プロサーファーの須田喬士郎くんには、部員のサーフィンを見てもらったり、アドバイスをもらったりしながら、サーフィン部メンバーのみんなが上達していけたらいいなと思っています。

医療者だけのサーフィン大会があるそうです。以前当院のE迫医師が出場し優勝したことがありました。今年度はMEのK妻くんが出場するかもしれません。ぜひ優勝して、種子島医療センターをアピールしてきてほしいと思います。



支えに感謝して

広報企画課 姫野 ナル(プロテニスプレーヤー)

2025年度は、主戦場を国際大会へ移し、ITFワールドテニスツアー中国・馬鞍山(Maanshan)、シンガポール、オーストラリア(Darwin)、ニュージーランド(Timaru)に出場しました。10月に行われた「W35 Darwin 2025」、2026年3月に行われた「W35 Timaru 2026」では、本戦へ進むことができました。今年度、これまでにない成績を収めることができたのは、新たに迎えた専属トレーナーの支えが大きかったと感じています。

また、選手活動と並行して続けている、種子島発のテニスイベントは、今年度から大阪でも開催することとなりました。イベントは大盛況で、今後はさらに全国へと活動の場を広げていく予定です。

さらに、月刊誌『致知』7月号(致知出版社 <https://www.chichi.co.jp/>)では、元ゴールボール女子日本代表の浦田理恵さんとの対談記事が掲載され、大きな反響をいただきました。

多くの方々に支えられながら、テニスを続けられていることに日々感謝しています。本年度も精一杯頑張りますので、よろしくお願いいたします。



【2025 年度 主な活動内容】

日程	場所	内容	結果
5月	久留米	ITF (w50)	予選決勝
5月	岩手	J1-7	ベスト 16
5月	岩手	J1-7 (ダブルス)	4位入賞
6月	中国	ITF (w15)	予選出場
8月	シンガポール	ITF (w15)	予選出場
10月	オーストラリア	ITF (w35) シングルス ダブルス	本戦出場
R8 3月	ニュージーランド	ITF (w35) シングルス ダブルス	本戦出場

医療講座

総務課長／広報企画課長 飯田 雄治

毎月1回、西之表市の公民館で行われている田上寛容理事長の出張「医療講座」（西之表市高齢者支援課・西之表市地域包括支援センター主催）は、今年度11回開催されました。さらに、6月には西之表市民会館で開催された地域サロン代表者研修会で講話を行い、2026年2月には中種子町の「種子島こりーな」で島民医療講話を開催しました。

島民医療講話は、中種子町にある田上診療所として初めて開催した医療講座で、当日は200人を超える方々にご参加いただきました。種子島弁を交えたユーモアあふれる話に会場は大いに沸き、難しい医療の話も身近なものとして伝わっているようでした。来年度も、多くの皆さまに楽しみにしていただければと思います。



日時	地域 / 団体	場所	人数
6月5日	地域サロン代表者研修会	西之表市民会館	130
6月12日	中目なでしこ会	榕城中目公民館	35
6月19日	城体操クラブ	城公民館	13
6月26日	中野福寿会	中野公民館	51
7月10日	本村元気アップ教室	住吉中央公民館	22
9月4日	下西高齢者学級	下西校区公民館	40
10月23日	天神町はつらつクラブ	天神町公民館	30
10月30日	湊泊安徳会	湊泊公民館	15
11月6日	立山高齢者学級	立山部落公民館	10
11月20日	池野老人クラブ	下西池野公民館	15
1月8日	よきの きらきら	住吉下能野公民館	11
1月15日	現和上之町・下之町 ひまわりクラブ・こすもす会	現和上之町公民館	20
2月11日	島民公開医療講座	種子島こりーな (中種子町)	215

【新聞掲載】

医療・福祉

「血圧の薬を飲み始めたら、一生飲み続けないといけないの？」と聞かれます。必ずしもそうとは限りません。高血圧は食生活の問題や運動不足などの生活習慣によって引き起こされることが多く、原因の生活習慣が改善されると、薬を必要としなくなるまで血圧が下がる人もいます。

外来では高血圧患者に対して、生活習慣の修正を勧めています。中でも運動不足が多いと感じます。そもそも現代人は、運動不足が多い傾向にあります。

歩いて生活習慣改善を

高血圧

「血圧の薬を飲み始めたら、一生飲み続けないといけないの？」と聞かれます。必ずしもそうとは限りません。高血圧は食生活の問題や運動不足などの生活習慣によって引き起こされることが多く、原因の生活習慣が改善されると、薬を必要としなくなるまで血圧が下がる人もいます。

外来では高血圧患者に対して、生活習慣の修正を勧めています。中でも運動不足が多いと感じます。そもそも現代人は、運動不足が多い傾向にあります。

「初めは10分でもいいから歩いてみてください」と勧めます。いきなり疲れるまで歩くと長続きしなかったり、足が痛くなったりしてやめてしまうので、まずは軽い疲労を感じるぐらいからでも大丈夫です。

歩くことは、高血圧のみでなく心血管疾患のリスクも低下させます。さらに糖尿病や骨粗しょう症、認知症の予防にもなるなど、さまざまな面で良いことがあります。ストレスを軽減する効果も得られます。そのほかのコツとして、誰かと一緒に歩くことが勧められています。一人で歩くよりも誰かと一緒に歩く方が、楽しく長続きできるのではないのでしょうか。

私事ながら、うちの夫婦も銀婚式を迎えてお互いに血圧が上がりやすくなる年頃になりました。最近、夫婦の会話も少なくなっている気がします。今更で少し恥ずかしくありますが、これを機会に「一緒に歩こう」と誘ってみようと思います。

種子医療センター理事長(西之表市)

田上 寛容

歩くことは、高血圧のみでなく心血管疾患のリスクも低下させます。さらに糖尿病や骨粗しょう症、認知症の予防にもなるなど、さまざまな面で良いことがあります。ストレスを軽減する効果も得られます。そのほかのコツとして、誰かと一緒に歩くことが勧められています。一人で歩くよりも誰かと一緒に歩く方が、楽しく長続きできるのではないのでしょうか。

私事ながら、うちの夫婦も銀婚式を迎えてお互いに血圧が上がりやすくなる年頃になりました。最近、夫婦の会話も少なくなっている気がします。今更で少し恥ずかしくありますが、これを機会に「一緒に歩こう」と誘ってみようと思います。

南日本新聞 2025 年 9 月 30 日掲載

【会報掲載】



鹿児島大学病院 地域医療支援センター発行
『せごどん LETTER』(第11号/2025年9月発行)



未来を託す医療者 ―種子島の地域枠医師たちの役割―

今から約四半世紀前の1992年、アマチュア天文家の向井優さんが発見した小惑星は「種子島」と命名されました。この為で満点の星が瞬く夜空を見上げる時、この宇宙のどこかにもう一つの「種子島」があると思うと不思議な感動を覚えます。

種子島の歴史は古く、旧石器時代に人間が生活
をした数少ない離島の一つであり、その歴史は非
常に古いものです。鹿児島県内で最も古い遺跡（約
3万5千年前：縄文前期）が種子島には余り
知られていません。また、種子島は「琉球漁民
の島」として、日本の歴史上重要な役割を果たし
ました。1543年の夏、第1代種子島崎時の時代（当
時16歳）、この島にポルトガル船が漂着しました。
時に種子島を2度を探りました。刀鍛冶の八坂金右衛門
時俊は火銃製造を請け負いました。それまで日本には
無かった「ナゲ」がここで初めて製造され、その
小さな実験ロケットは明治維新後の産業革命に
おいて重要な役割を担うことになりました（図1）。
あまふれんこ館百官の柱。種子島：宮本千鶴

それから約四百年の後、種子島に宇宙センター



が建設されたものまた不思議な巡り合わせによります。当時はまだ沖縄海溝が実現していません。日本の主権がまだ南緯圏に近い海域で種子島だったのです。言い換えると、沖縄海溝がそれ以前に実現していれば、種子島に宇宙ステーションが作られることはなかったかも知れませんが、1968年9月に最初の気象観測用 SB ロケットが発射され、1976年2月、日本初の衛星衛星「きく2号1号」が打ち上げられました。2025年6月には、これまで史上最大の日2400キロの30 回と1回の軌道調整上げが成功し(図2)、今後はさらに大型の30キロメートルに受け継がれ、その性能は数倍に拡大する生活環境(医療環境も含めて)を大きく変えることになっていふでしょう。

このように、種子島は数奇な運命によって歴史

図2



このように、種子島に成るこの地勢により、歴史にその名を残してきました。この島では「思いもよらないことが起こり、思いもよらない人たちが、思いもよらないかたち」で歴史を紡いでいるのです。種子島を知れば知るほどこの島の不思議な魅力に引き付けられます。壮大な自然、豊かな農畜産業、漁業、古い歴史、宇宙センターの先端



科学が融合した島であり、住む人々は温和で優しい。そしてこの島でも、近年の急速な少子高齢化による高齢者人口比率の増加が離島医療の在り方に大きな影響を及ぼし始めています。

このような特徴的な離島の環境の中で、地域枠医師が活躍する病院として種子島医療センターがあります。彼らの当院での役割は以下の通りです。

1. プライマリケアへの従事

私たちの病院は救急患者をすべて受け入れます。医師をはじめ全ての職員が力を合わせ、全ての患者さんのニーズに応える。これは当たり前のことではありますが、それを着実に実行していることに驚きを感じます。医療の原点であるプライマリーケアの前線に立ち、様々な症例の体験を通じて患者さんとのコミュニケーション能力を高めることは、良質な医療従事者になるための必須条件であると私たちは信じています。種子島の医療は、まさにこれらを私たちに教えてくれる場です。

各科に配置された地域仲医師の皆さんが種子島医療の先頭に立って最も重要な医療業務を担っています。子どもから高齢者まで、患者さんは絶え間なく来院されます。とくに、救急医療におけるトリアージは極めて大切で三次救急が必要な場合には、ヘリ搬送の判断が求められます。さらに、外科系診療と手術、臓器、内分泌など、多彩な診療と技術を専門員から指導を受けることで身につけていくことができます。また、全国から来学する研修医、医学生、看護士たちへの指導も行います。

一方、これからの医療は大きく変わることが予測されています。AI(人工知能)やロボットの導入、再生医療、遺伝子診断・治療、医療機器・薬剤の新規開発などの進歩は著しく、数年後の医療は現在と異なる様相を呈するでしょう。幸いなことに、これらの最新の医療情報は難島でも同時に手に入

いもよらないこと」が起こる為です。その時、私たちは慎重かつ慎重に、新しい医療を受け入れる努力をしなければなりません。

2. 地域包括ケアと防災医療

訪問看護、訪問リハビリ、へき地診療。さらに自治体との連携による健康寿命を延ばす市民公開講座といった予防医療への展開も、かけがえのない経験となるでしょう。

3. 探究心を持つ医師にとっての魅力

探究心を持つ地域仲医師にとって、種子島は非常に魅力的な島です。症例報告にしたいような症例が豊富にあり、そのような症例と向き合い、論文にする時間も十分に確保できます。診療を最初から最後まで完結できる環境が整っています。

4. ワークライフバランス

プロフェッショナルとしての充実した医療業務の後、種子島の豊かな自然と歴史は、人々の精神的・肉体的ストレスを癒す力を持っています。都会では得られない「自然」「遊び」「癒し」が、明日への活力を再生してくれるでしょう(図4)。とくに、家庭を持ち子育て真っ最中の方々に、「図4」を見てモヤッとした島である種子島はお勧めです。

仕事と家庭のワークライフバランスを自然に身につけるチャンスでもあります。

一方、種子島の「食」にも一言触れなければなりません。生活の基盤となる「食」は種子島では、飢饉の時に多くの人々が生き残ってきた歴史があります。すなわち、農業、畜産業そして漁業が食で食糧供給率は500%以上と報告されているようです。何と言っても食材の豊富さと新鮮さを楽しむことができます、それがここの生活を豊かにしてくれます。

種子島は、まさに「幸運な時を創む島」です。私たちは、この素晴らしい特性を過去から未来へと受け継いでいかなければなりません。そして、未来を切り拓く種子島の医療は、地域枠医師の皆さんに託されていると言っても過言ではないでしょう。



【書籍掲載】



『明日の高齢者医療を拓く信頼のドクター2025年版
信頼の主治医』

編著 ぎょうけい新聞社 令和7年12月18日発行

**24時間365日体制で患者を受け入れる種子島唯一の二次救急指定病院
高齢患者でも受けられる体に負担の少ない低侵襲手術を実施**

種子島医療センターは、188床の入院病床と26の診療科目、およそ400名のスタッフを擁し、種子島屈指の規模と陣容を誇る医療施設である。現在は、子どもから高齢者まであらゆる世代に医療を提供できる体制が整っている。

同センターの特徴は、高齢世代の患者が7〜8割と大多数を占めている点。これに関して高尾院長は、「年々高まる高齢者医療のニーズに応えるべく、救急、外科・内科、リハビリテーション全てに対応できる体制を敷き、それぞれのクオリティの高さはもちろん、部門同士の密な連携も大切にしています」と話す。

全国から働き手が集う種子島屈指の医療機関

高度な医療と患者に寄り添うホスピタリティで実現する
“しあわせの島、しあわせの医療”

医療の分野で貢献し、
種子島の人たちに安心の生活を
届けられるようにしていきたいです

社会医療法人義順顕彰会 種子島医療センター

院長 高尾 尊身

社会医療法人親順顕彰会 種子島医療センター

救急においては、種子島唯一の二次救急指定病院に認定されており、救急で運ばれてくる患者を24時間365日体制で受け入れ、いかなる場合も断らない医療を実現。主に、脳卒中や心筋梗塞、骨折などでの救急搬送が多く、救急車搬送は年間約1000件、命を救う最後の砦として大きな役割を果たしている。

外科・内科医療についても、センターに在籍する熟練の医師と最新鋭の設備を駆使してほぼ全ての疾患に対応する。「高齢者の方々に対しては、体への負担を極力かけない低侵襲治療を積極的にを行っています。今は手術のリスクを考慮しなければならぬような、80・90歳といった高齢患者さんに対しても、低侵襲により普通に手術を行うことができます」

力を入れているのは低侵襲治療の代表格ともいえる腹腔鏡手術。高尾院長は鹿児島大学フロンティアサイエンス研究推進センターの教授時代、全国から腹腔鏡手術の研修を受ける多くの若い医師が参加した、ミニプラを利用した腹腔鏡手術研修施設を2004年に創設し、2014年の退官まで運営した経験を持つ。まさに腹腔鏡手術のバイオニア的存在である。

疾患別のスペシャリストが揃うリハビリ専門スタッフ
多職種連携で提供する訪問による診療、介護、リハビリ

「高齢者医療の根幹を成すのがリハビリテーション。言うまでもなく重要な分野です。当センターで多くの手術を実施できているのは、しっかりとリハビリの体制が整っているからであることは間違いありません」

高尾院長も絶対の自信を見せる種子島医療センターのリハビリテーション。およそ80名のリハビリ専門スタッフが在籍し、整形外科、脳卒中、呼吸器、認知症、終末期など、疾患別のスペシャリストが揃っている。

明日の高齢者医療を拓く
信頼のドクター 2025年版

高度な医療と患者に寄り添うホスピタリティが特徴の種子島医療センター

多くの専門スタッフがチームとなり、術前後後の急性期、急性期を脱した後の回復期、そして退院後の生活期と、全てのシーンにおいて一連のリハビリ医療を提供する。「お一人ひとりの患者さんにとってベストとなるリハビリを行い、日常生活動作（ADL）の向上に努め、寝たきり防止、社会復帰の支援に努めています」

こうしたリハビリ分野、そして前述の救急医療や高度な低侵襲治療など、様々な部分に特徴をもつ種子島医療センターだが、近年もう一つ力を入れて取り組む分野がある。それが、自宅や施設への訪問診療、介護、リハビリだ。「通院が困難な方や退院後の方も安心して生活が送れるよう、多職種や関連施設が密に連携しています。家自体が入院施設であるかのごとく、訪問によっても医療やリハビリを提供させていただきます」

救急、治療、入院、訪問とまさにシームレスな医療提供体制を整えた高尾院長は、「我々が今高齢者医療を行う上で目指しているのはQOD（クオリティオブデス）の向上です。デスという言葉は少し物騒ですが、要はいかに幸せに死んでいくか。そこにフォーカスしています」と話す。

社会医療法人親順顕彰会 種子島医療センター

「超高齢社会の中で目指すのは『QOD（クオリティオブデス）』『島に住む全ての方を孤独にさせず、亡くなる最期まで面倒を見させていただきたい』」

「今日の日本の人口で一番多い世代は、団塊の世代である75歳前後の方々です。となれば、人は当然いざ死にますから、これから大量に人が死んでいく時代がやってくることは間違いありません。この、団塊世代を中心とした今の高齢世代の方々が、いかに幸せな老後を送り、いかに幸せな最期を迎えられるか。当センターはそのサポートに注力していくというわけです」

病気が寝たきり、不慮の事故など、色んな最期の形があるが、近年誰にも気づかずひっそりと亡くなってしまう孤独死が都心部を中心に増えている。「孤独死は最期の迎え方としては決して幸せではない寂しいもの。体の健康と同様、人との繋がりも、幸せを感じる上で大きな要素だと思います」

こう話す高尾院長は、「当センターの訪問医療を通して、島に住む全ての方を孤独にさせることなく、亡くなる最期まで面倒を見させていただくことができればと考えています」と力を込める。また、この種子島という地域自体も、いわゆる「近所付き合いが当たり前に行われ、たとえ血の繋がりがなくても皆が家族同然に交流し、助け合う文化が根付いている」。

「種子島は都会に比べ、人との絆や繋がりを強く感じることが出来る場所です。センターでの外来や訪問診療においても、医師を含めた医療従事者と患者さんの距離がとて近しい。都心の病院では決して味わえない医療を受けることができるのではないかと思います」

断らない救急、プライマリケアの実践は成長にうつつの場
「全国の医療従事者の方々に魅力一杯の種子島にぜひ飛び込んで来て欲しい」左から2人目：理事長。4人目：会長（創始者）。5人目：高尾院長。
社会医療法人親順顕彰会の理事のメンバー

2025年4月、種子島医療センターに、勤務医13名が新たに交代、職員14名が新規に入職。計27名のスタッフが仲間入りを果たした。新たな力が続々と入ってくる同センターで働く医師やリハビリスタッフのおよそ8割は、島外出身の人材。中には北海道や福岡、大阪など、種子島医療センターの評判を聞きつけて、遠方から飛び込んでくるスタッフもいる。「ここ、種子島医療センターは成長にうつつの場です」と高尾院長は話す。「たとえば救急の現場においては、断らずに全てを受け入れるため、色んな病態の患者さんを診なければなりません。またプライマリケアを重視しており、問わりを持った患者さんに生涯寄り添い、その患者さんの健康に全責任を負い、向き合っていく医療も求められます。要は頼る所もなく逃げ場もない、医師としての力量が試される場、それが当センターの特徴であるといえます」

高尾院長は、医師やリハビリスタッフだけではなく、看護師や医療事務スタッフなど、医療に携わる全国の人材に、



種子島最大行事「鉄砲まつり」では手踊りを披露し、地域住民との交流を深めている

今後の種子島も、ますますの人口増が見込まれることは間違いないと話す高尾院長。その一因が馬毛島の自衛隊基地建設だ。馬毛島は、種子島・西之表市に属する、同市から約10km離れた無人島。ここに航空自衛隊の基地を立ち上げるべく、現在建設が進められているのだ。「現状、建設関係者の移住による人口増もありますが、完成後は自衛隊員とその家族も大勢種子島に移り住んでくるでしょう。これに対応すべく医療面において、我々種子島医療センターがしっかりと受け皿を構築していかなければなりません」。

このため、2024年に新たに馬毛島診療所を開設した。診療所の患者と種子島医療センターをオンラインで繋ぐことも可能で、馬毛島においてもクオリティの高い医療、そして幅広い疾患に対応できる体制を整えた。

このように、馬毛島を含めた種子島エリアにおいて人口増が見込まれ、今後ますます大きな役割が求められる種子島医療センター。同センターのようないわゆる離島医療は、人材・設備などの医療資源が乏しいことから、適切な医療を受けるために航空機やヘリを使って本島の病院へ行くといったケースが珍しくない。そうした中で高尾院長は、「離島医療の常識にあてはまらない医療機関がここ、種子島医療センターです」と自信を見せる。

「私はここに赴任するまで、日本だけではなく、世界中色々な病院で勤務して経験を積みましたが、医療機関で大事なのは場所ではなくその病院で何ができるか、特徴をしっかりと打ち出しているかだと思っています。その点、種子島医療センターは離島であるにもかかわらず、救急、手術、検査、リハビリ、どこをとっても都会の病院と何ら遜色のない高度な医療を提供できる体制が整っています。当センターのように、離島であっても都会と同じような医療環境を構築することは十分に可能なのです」。

今現在、こうした充実の医療提供だけではなく、地域住民への情報発信にも力を入れている。その一環が定期的に行われる市民公開講座だ。

「毎回色んなテーマでお話をさせていただきますが、たとえば、『健

今後ますます人口増が見込まれる種子島 「全ての面でレベルアップし、島内医療の完結をより強固なものにしていきたい」

「ここ種子島医療センターに興味をもって飛び込んで来て欲しい」と呼びかける。「私自身もここにきて10年程ですが、とても快適に過ごすことができます。住民の方々は質、違う価値観や文化をすぐに受け入れる多様性があり、温かく、食べ物も驚くほど美味しく、都会では考えられないような価格で立派な家に住めます。インターネット環境も当たり前の時代ですし、離島暮らしのデメリットは本当に少なくなりました」。

種子島の魅力を力説する高尾院長だが、実際種子島は今、人口が増えている。注目すべきは、女性が一生のうちに子どもを産む数に示す出生率の高さ。種子島は子育て支援制度が充実していることもあり、全国でも上位の数値を記録。子どもの人口も着実に増えているのだ。「当センターでも3名の小児科医を配して、子どもにも手厚い医療を届けられる体制を整えています」。

PROFILE

高尾 尊身 (たかお・そんしん)

1949年生まれ。福岡県出身。
1973年、鹿児島大学医学部卒業。
1974年、鹿児島大学医学部外科第一講座入局。
1978年、Iran-Japan Petrochemical Company Limited (イラン) 海外医療勤務。
1979年、イラン革命を体験して帰国。
1987年、鹿児島大学医学部助手 (第一外科)。
1992年、米国留学：ボルネオのジョンズ・ホプキンス大学医学部外科講座。
1997年、鹿児島大学医学部・助教授 (第一外科) 計画臓器外科。
2003年、鹿児島大学・生命科学資源開発センター教授。
2004年、放送大学客員教授 (2004.4～2009.3)。
2005年、鹿児島大学フロンティアサイエンス研究推進センター教授、癌再生医学分野教授 (兼任)。
2014年、社会医療法人義順顕彰会 種子島医療センター副院長就任 (2014.4～現在)。鹿児島大学先端医療開発分野 特任教授 (～2016.3)。種子島大学革新医療研究センター客員教授 (2014.4～現在)。鹿児島大学病院臨床教授 (2017.4～現在)。消化器・乳腺・泌尿器外科各研究員 (2014.4～現在)。

所属・活動

日本外科学会会員 (認定登録医)、日本消化器外科会 (指導医)、日本消化器病学会会員 (専門医)、日本計画外科学会 (特任会員)、日本とトランスパシフィック学会 (理事・編集委員)、日本癌治療学会、緩和ケア認定医、認知症サポーター、鹿児島県医師会専門委員。

INFORMATION

社会医療法人義順顕彰会 種子島医療センター

URL <https://tanegashima-mc.jp/>

所在地	〒891-3198 鹿児島県種子島市西之表7463 TEL 0570-09-0960 FAX 0997-22-1313
アクセス	鹿児島空港から種子島空港まで飛行機で約40分、種子島空港から現地まで車で30分 鹿児島空港(南第1)から種子島港(西之表)まで高速船で約1時間35分、種子島港(西之表)から現地まで車で5分 種子島・屋久島交通 空港線「豊島」停留所より徒歩約2分 大和交通 空港線「豊島」停留所より徒歩約2分
診療時間	(月～土) 9:00～12:30、14:00～17:00 (休診日) 日・祝
診療内容	新設内科、呼吸器内科、消化器内科、泌尿内科、総合診療科、一般内科、糖尿病内科、腎臓内科、血液内科、心臓内科、泌尿器科、消化器外科、肝胆外科、乳腺・甲状腺外科、整形外科、小児科、皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科、歯科、腎臓内科 (通所)、リハビリテーション科、ペインクリニック
設立	1969年

院長 榎野 種子島は、鉄砲伝来の歴史と最先端科学の集積であるロケット基地、そして美しい大自然が阿努する稀有な島です。私は、平成26年4月からこの種子島の中枢医療を担う義順顕彰会・種子島医療センターに赴任いたしました。

種子島の離島医療は、田上正先生によって開設された小さな診療所から始まり、住民のニーズに合わせて診療科目を増設しながら、50年の間に総合病院へと発展してきました。リハビリテーションセンターの設置、在宅療養のサポート、高齢者、障害者に対する在宅医療支援など、地域医療の発展に数々ならぬ努力と忍耐の甲斐やそれできたことは数多くあります。これらでの種子島医療センターの医療活動は、この場における中枢医療機関としての役割を十二分に果たしてきたと言っても過言ではないでしょう。

康寿命を延ばすには？「家庭血圧測定のスヌー」では、高血圧が健康寿命に及ぼす影響等を解説したり、『ひさの痛み』多形性皮膚腫瘍について、『では、症状に対する治療や予防についてお話ししたり。毎回色々なテーマの情報を専門医から発信させていただき、参加者の方々には病状や健康に関する幅広い知識を得ていただければと願っています」。

さらに種子島医療センターでは、地域と色んな形で繋がろうと、様々なイベントにも積極的に参加している。2025年8月には、鉄砲伝来を記念した種子島最大行事である「鉄砲まつり」に参加。このお祭りの中では、スタッフたちが業務の合間を縫って練習した新しい手踊りを披露、こうしたイベントを通して地域住民との交流を深めている。

こうした様々な取り組みの動機は、全ては島に住む人々の健康のため、そして幸せのため。これからも種子島医療センターの存在を通して、人々や社会に幸せを届けていく。